

平成 30 年 5 月 30 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370246

研究課題名(和文)大岡昇平文学の基礎的および総合的研究 創作ノート・原稿類を含む

研究課題名(英文)A study on the literature of Shohei Ooka including his manuscripts

研究代表者

花崎 育代 (HANAZAKI, Ikuyo)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：00259186

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：大岡昇平の文学研究において、自筆資料まで視野に入れたものは、当該研究代表の花崎による科研費課題(研究課題番号：21520217、平成21～24年度)以外はほぼ皆無であった。本研究はこの現状に鑑み、上記花崎の研究に連なるものとして創作ノートや原稿段階からの大岡文学の基礎的総合的研究を企図した。研究の結果、『野火』については、その原稿(部分)の発見と調査から、無辜の比島女性殺害を誰にも「口外しない」という改稿が主人公田村における孤独と社会希求を切実にしたこと、『花影』については、主人公葉子から「恨み」の感情を削除し孤高の存在としたこと、などを検証、戦後期の作品生成を具体的に実証した。

研究成果の概要(英文)：In studies on the literature of Shohei Ooka, the study by HANAZAKI, Ikuyo (JSPS KAKENHI Grand Number JP21520217, 2009-2012) was the almost only one as a work which brought his manuscripts into perspective. This research was planned as a more comprehensive study on the literature of Shohei Ooka including his manuscripts. As a result, as to "Nobi(Fires on the Plain)", we showed, using newly found manuscripts, that the revising the mind of leading character Tamura into 'telling nobody' about the fact of killing a Filipino woman, made Tamura's loneliness and desire for linkage to society more poignant and as to "Kaei(The Shade of Blossoms)", we proposed a new insight that the deleting the leading character Yoko's 'bitter feeling', made her an isolated and independent existence. Through these and other investigations, we inquired the making process in post-WW period concretely.

研究分野：日本文学

キーワード：大岡昇平 戦後文学 『野火』 『花影』 草稿研究 国文学 デジタルアーカイブ

## 1. 研究開始当初の背景

戦後文学にとどまらず日本近代文学を代表する作家のひとりである大岡昇平の文学研究においては、その作品における内容にかかわる改稿のおびただしい作品が多いにもかかわらず、その創作ノートや原稿まで視野に入れたものは、当該研究代表の花崎育代による科研費課題「大岡昇平文学の基礎的および総合的研究 構想ノート・草稿類を含む」(研究課題番号: 2150217、平成21~24年度)以前はほぼ皆無であった。

上記花崎科研以前の状況を簡潔に記しておく。活字資料の生成過程については、大岡昇平生前に中央公論社版、岩波書店版の全集編纂実務を担った池田純溢氏が夙に『野火』について論文「生成過程における「文体」稿の位置」(『日本文芸研究』1971年)などを行っている。また吉田熙生氏も筑摩書房版全集(全23巻別巻1)を主導的に編纂し、本文異同につき「解題」等で報告している。本研究代表者の花崎も大岡の代表的な三作品『俘虜記』『武蔵野夫人』『野火』の連関を初出稿から探究した論文「大岡昇平 戦後の出発」(『国文学』1984年)以降、単著書『大岡昇平研究』(双文社出版、2003年、第12回やまなし文学賞(研究・評論部門)受賞)にまとめた論考などで考察してきてはいた。しかしその先行研究における創作ノート・原稿類の調査は、畑有三氏が「構想ノートの検討」(『国文学』1968年)を、樋口覚氏が『一九四六年の大岡昇平』(新潮社、1993年)を、それぞれ翻刻活字化された資料で扱っている他、自筆資料については平松達夫氏が『三島由紀夫と大岡昇平』(朝日新聞社、2008年)で、ごく一部の草稿を参照しているといったあたりであり、きわめて少なかった。

こうした状況にあって、上記花崎の科研費を含む研究では、以下の成果をなし得た。すなわち、『俘虜記』等、大岡戦後最初期作品の原稿や構想ノート等自筆資料をデジタルカメラによる撮影を行うことにより詳細に分析、活字資料を含めた総合的な考察を行うことができた。デジタルカメラでの撮影は、戦後期の紙媒体の質的性格から資料劣化による研究不能の事態を早急かつ未然に防ぐ意味でまず喫緊かつ重要なものであった。また、この研究により、大岡自身が体験した俘虜という存在を大岡がいかに考えていったのかという問題を中心に精緻に考察することができた。そして、大岡文学においては当初は各作品に混在していたテーマが『俘虜記』『野火』『出征』などに分岐し、それぞれの作品において展開されたことを、実証的に論証した。たとえば未分化の問題が、「降伏」の問題は『俘虜記』で、「社会的感情」の問題は『野火』で追究するなど分化していったことなどである。詳細は上記時期の論文で論証したが、こうした大岡昇平の作家的出発期における作品生成を具体的かつ実証的に考究し得た。

しかし、大岡昇平の戦後期における膨大な作品の自筆資料を含む研究について、上述の花崎科研の成果は、ようやくその歩を進みはじめたばかりというべきである。戦後出発期のみならずそれ以降の『花影』などを含む作品群の創作ノート・原稿類の調査研究も、資料劣化の問題も含め、まったなしの状況であり、これらの研究が次なる課題となっていた。

## 2. 研究の目的

本研究代表者花崎は、博士号を取得(2004年)(文学、日本女子大学)した「大岡昇平研究」(およびこれに基づいた前掲花崎単著『大岡昇平研究』)のほか、筑摩書房版『大岡昇平全集』第23巻(2003年)の「参考文献目録・主要参考文献解題」、河出書房新社『日本文学全集 18 大岡昇平』(2016年)の「大岡昇平年譜」をそれぞれ編纂著述、その他にも多くの大岡文学論文を執筆、発表し、特に平成21~24年度の前記科研を含む研究では、『俘虜記』『武蔵野夫人』『野火』『出征』等に関する手稿段階からの研究も公表してきた。本研究ではこれまでの研究をふまえながら、さらに創作ノート・原稿類をも調査することを含む考究を進展させることによって、大岡文学の生成過程をはじめとして、より精緻な研究に発展させることを目的とした。

以下に少しく記す。

(1) 大岡昇平は夥しい改稿を有する作家であり、活字段階においてさえ頻回にわたっており、作品がつねに生成され続けていたことは改稿過程探究の重要性を明証している。このため、これの解明を軸とした研究を目的とした。

なお、具体的な活字段階の改稿としては、たとえば『野火』において中断を含む初出誌の段階(雑誌『文體』、雑誌『展望』)においても、冒頭の大膽な削除(いわゆる「初出導入部」の削除)を含む大幅な改稿を行っていること、『花影』において、エピグラフを初出誌(『中央公論』)では、「ラシーヌ」による文言であったものを、単行本以下では<Dante>によるものに変更するという大きな改稿の他にもさまざまな加除がみられること、などが挙げられる。

(2) 大岡昇平の自筆資料の多くは神奈川近代文学館に収蔵され「大岡昇平文庫」などとして公開されている。しかし、最新の全集である筑摩書房版『大岡昇平全集』全23巻別巻1の刊行が2003年8月までを要し、その後の受け入れ、整理となったため、研究者による本格的な調査は、2009(平成21)年から2012(平成24)年に至る上記本研究代表者花崎による科研を含む研究がほぼ端緒という段階であった。よって、上記科研の後継的研究として、資料ごとの詳細な調査を行い、大岡文学生成過程を中心とする研究をより進展させることを目的とした。

(3) 日本近代文学における、活字化され

ていない草稿等の資料研究としては、本研究開始時において、フランス文学における生成研究を応用したものへの注目から進んでいったといえる。松澤和宏氏（フローベル研究を応用した夏目漱石研究）、吉田城氏（ブルースト研究を応用した芥川龍之介研究）などである。その後、堀辰雄に関する渡部麻実氏の考究なども登場した。「生成論は方法や理論である前に、なによりもまず新たな対象の発見と構築」（松澤『生成論の探究 テキスト 草稿 エクリチュール』、名古屋大学出版会、2003年、p.65）とされるように、創作ノート・原稿類から活字テキストへの変遷、さらなる活字段階での改稿、と、その豊富な異同を発見し調査し、検討を加えることで、作品の豊饒さを精緻に読み込むことを目的とした。

（4） 自筆資料の検討においては現物を丹念に調査することが肝要である。しかし本研究が主な対象とする敗戦直後からの戦後資料は、媒体（原稿用紙やノートなどの紙）の素材の品質が劣るだけでなく、経年劣化の著しさによって頻回の詳細な調査に堪えられないものと判断された。よって、将来的にも大岡昇平文学研究のみならずひろく近代文学研究において貴重な資料を保存するという観点においても、現物を重視しつつもデジタルカメラ撮影資料による検討によって、資料保全と探究の両立をめざした。

### 3. 研究の方法

本研究の目的を達成すべく、大岡昇平の活字資料とともに創作ノート・原稿・校正刷書込み・全集書込み等自筆資料、また大岡旧蔵資料等の探究という方法を採用した。

活字資料については、過去三回の大岡昇平全集（中央公論社版、自選選集の岩波書店版、筑摩書房版）はじめ公刊された大岡著述資料、また大岡に関する研究書籍や関連書籍等の参考資料を研究材料とし、読解考究した。必要に応じて日本近代文学館（東京都）、神奈川近代文学館（神奈川県）等に赴き、複写できるものについてはこれを行うなど、読解していった。

自筆資料や大岡旧蔵資料については、この多くを所蔵している神奈川近代文学館を中心に赴いて調査考究、一眼レフデジタルカメラによる撮影の可能なものについてはこれを行うなどして、精緻な作品分析と考察を行うよう努めた。

自筆資料の読解には資料劣化の問題だけでなく、書き手の特性も結果に作用する。本研究の対象である大岡昇平の自筆資料に関しては、活字で削除された箇所のある資料が多いなどの重要性の一方で、文字が小さいことや略字が頻繁に用いられていることで、困難な部分も多く存在した。こうした判読困難な文字の読解の場合には、活字資料に自筆原稿の文字のまま定着した文字を参照し、これを用例として、確定作業を行う、という方法

を採用した。

このように活字資料、自筆資料等を総合的に考究するという方法によって、異同ヴァリエーション豊富な振幅ある大岡文学テクストのより精緻で豊かな読解の開拓をめざした。

### 4. 研究成果

日本近代文学を代表する作家のひとりである大岡昇平の文学研究において、これまで花崎の前記科研（平21～24年度）による研究以外はほぼ皆無であった自筆資料を含む総合的研究を進展させた。特に代表作『花影』等を有し、かつ、資料劣化の懸念から緊急性を要する昭和三十年代前後を中心とした自筆資料をデジタルカメラによる撮影を行うことにより詳細に分析、活字資料を含めた総合的な考察を行うことができた。この考究により、『花影』においては、複数の研究的読者から出されていた、作品表題に関わる記述に作者大岡の誤謬を指摘する見解に対し、本研究代表者はすでに活字資料のみにおいても誤謬でないことが証されると表明していたが、本研究において、活字段階だけでなく、原稿段階においても作者が入念に考えた末での表現であったことが明証された。さらに『花影』が主人公葉子の造型として、他者への「怨み」をいったんは記述しながら削除していることが判明したことで、孤高の人物としての造型、作者曰く「ワンウーマン小説」が、辛苦を他者に転嫁しないという側面からも証明されたことは重要である。

ところで、当初の予定を超えた発見とそれによる考究として特筆すべきは、大岡昇平の代表作で戦後発刊期の『野火』の、雑誌『展望』初出第三回分原稿についてである。本研究期間の初めに、該原稿が古書市場に出たことが判明、日本にとどまらず世界の文化的資産ともいえる貴重な資料が、私有化あるいは散逸することもやむを得ない仕儀に至った。本代表研究者花崎は、公的機関での所蔵による資料保存と研究促進をめざすべく、急遽、本科研費により購入した。（調査と研究内容は以下に簡潔に記す。詳細は雑誌論文（4））調査の結果、当該原稿部分に、作品『野火』の主題である孤独と＜社会的感情＞との問題に密接にかかわる改稿部分が存在することが判明、テーマに関し生成過程から実証的に論証することができた。

なお著作権継承者により、検証した自筆資料の影印の出版や全文翻刻引用掲載は基本的に許可されなかったが、デジタルカメラによる撮影と論証に必要な最低限の翻刻引用掲載は許可を得ることができた。こうしたご遺族 著作権継承者のご理解にもよって、本研究が可能となっていることも付記しておきたい。

また、神奈川近代文学館所蔵大岡昇平自筆資料のデジタルカメラによる撮影については、内藤由直、八原瑠里、沖川麻由子、児玉明梨の各氏の助力を得た。

以下に本研究の具体的な成果を記す。

(1) 当初の予定外であった『野火』原稿の雑誌『展望』初出第三回分(同誌1951(昭和26)年3月号掲載分)の市場への登場と、本研究費で購入したことによって可能となった研究について記しておく。当該原稿は2001(平成13)年2月刊行の『近代作家自筆原稿集』(保昌正夫監修/青木正美編集・解説、東京堂出版)にその冒頭1枚目影印が掲載されていた原稿である。2013(平成25)年7月東京古書会館開催の第48回明治古典七夕古書大入礼会の出品目録に掲載された。『野火』の『展望』初出第5~8回(終回)を所蔵する神奈川近代文学館に書店を通して問い合わせたところ、購入予定がないとの回答を得た。研究者以外を含む合法的私有化による今後の研究の困難や厄災等による散逸の危惧から、本研究代表者は急遽、本科研費により購入、公的機関である所属機関(立命館大学衣笠キャンパス)保管とし、開かれた研究環境においた。そのうえで、調査研究を行ったところ、該原稿では、『野火』作品内の画期をなす無辜の比島女性殺害を、当初は出会った同胞たちに告げていたと書かれていた。しかしこれを削除し「口外しない」と変更し、初出以降発表している。この発見調査により、直前の記述「人とも交わることができない體」(『展望』1951(昭和26)年2月号)という意識を、同胞と共有して希薄化などさせずに、社会を希求しつつ孤独であり続ける主人公の造型、本作における「社会的感情」の重要性を原稿段階からも明証することができた。

(2) 『化粧』は1953(昭和28)年の新聞連載小説であるが、その創作ノートには「1946」年の記載があることから明らかなように、戦後始発期からこの小説の構想があったこと、また多種の要素が未分化の状態が存在していたことが判明した。

(3) 『ハムレット日記』の単行は1980(昭和55)年であるが、初出は1955(昭和30)年である。その初出時の創作資料には同時代の世界状況をうかがわせるパンフレット類もあり、大岡が初出時連載前に「政治劇的なハムレットを」描きたいと述べていたことを裏付ける資料の存在を確認した。

(4) 『花影』は一女性が自死するまでが、その女性葉子に寄り添う語りで描かれた作品である。その作品タイトルの重要なイメージを形成する具体的な行動が、葉子が松崎とともに赴いた「吉野行」の記述と記憶である。作品終盤の「とうとう吉野へは連れてってくれなかったわね」という葉子の松崎に向けた科白について、本研究以前に複数の研究者から、冒頭近くに吉野行の記述があるにもかかわらず「もう一度」などが記されていないのは忘却が誤記か

といった発言がみられた。本研究代表者花崎は夙に小説的リアリティから違和はないと述べていた(1996年6月、昭和文学会春季大会)が、活字媒体で既に初出誌に「あれつきり」と記されているのみならず、原稿段階で「もう一度」と記していたのを敢えて削除していること、すなわち忘却でも誤記でもないことがさらに実証的に明らかとなった。「もう一度」と、次が最後の吉野行であること、つまり自死の覚悟をほめかす手管で相手を引き留めること、そうした人物造型を峻拒する書き手大岡の姿勢が明確であることを改稿過程から証明した。また、晩年の「もう一度」の書入れ(最終テキスト)という読者への過剰な「親切」に、書き手による研究的読者への諦念の可能性という、研究者の読解力の問題に及びながら、記述内容を保持しつつ読み進めるといふ長篇小説を読むことの内実についても言及した。

(5) 『花影』は作者自ら、後に「ワンウーマン小説」(「わが文学に於ける意識と無意識」、1966年12月)と述べる作品である。本研究代表者花崎は過去の論文において既に、初出稿から単行本へという過程において、男性たちなど周辺人物と葉子、といった風俗小説的なものから葉子主体の小説へ、という変化があることを実証的に検討してきた。本研究においてはさらに原稿段階にまで遡ることによって、葉子の孤高的造型が明らかになった。すなわち、たとえば遺書を書こうとする末尾近くの段になって、葉子が急に保護者の人物高島を「うらんでゐないと、書き残す」とする唐突さが、実は初出中盤時点の原稿で高島への「怨み」と書きかけてこれを削除していたことを確認することで、葉子の孤絶が、誰かを「恨」むといった他責的心情を軸とせず、孤高的いわば自尊心の発露として示されたものであることを明証した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

- (1) 花崎育代、大岡昇平『花影』の生成 初出原稿からの考察 子供の声・「怨み」の削除・葉子の孤絶、国語と国文学、査読有、第95巻第4号、2018、pp.3-19.
- (2) 花崎育代、三島由紀夫・方法としての貴種流離 昭和三十年前後・「鬮売恋曳網」「海と夕焼」を中心に、論究日本文学、査読無、第107号、2017、pp.1-16.
- (3) 花崎育代、書評 立尾真士著『「死」の文学、「死者」の書法 椎名麟三・大岡昇平の「戦後」』、日本近代文学、査読無、第94集、2016、pp.255-258.

- (4) 花崎育代、大岡昇平「野火」手稿『展望』初出第三回分について、  
論究日本文学、査読有、第100号、2014、  
pp.135-144.
- (5) 花崎育代、太宰治「ろまん燈籠」考  
グリム童話集と連句的発想と、  
太宰治研究、査読有、第21号、2013、  
pp.11-20.

〔学会発表〕(計 2 件)

- (1) 花崎育代、大岡昇平『花影』吉野  
行の記述から考える長篇小説 連続  
講義「世界の長篇小説」第1回、2016  
年
- (2) 花崎育代、大岡昇平の自筆資料を調  
査して、日本近代文学館図書資料委員会、  
2013年

〔図書〕(計 5 件)

- (1) 花崎育代、白百合女子大学 言語・  
文学研究センター編、アウリオン叢書  
18 長篇小説の扉、弘学社、2018、137p  
(pp.57-70.)
- (2) 花崎育代、浦西和彦・檀原みすず・  
増田周子編、田辺聖子文学事典 ゆめい  
る万華鏡、和泉書院、2017、368p(p.156、  
pp.277-278、pp.291-292、p.324.)
- (3) 花崎育代、池澤夏樹=個人編集、大  
岡昇平年譜、日本文学全集 18 大岡昇  
平、河出書房新社、2016、446p  
(pp.432-446.)
- (4) 花崎育代、有本伸子・久保田裕子編、  
21世紀の三島由紀夫、翰林書房、2015、  
326p.(pp.224-227.)
- (5) 花崎育代、安藤宏・栗原敦・紅野謙  
介・十重田裕一・中島国彦・宗像和重編、  
近代文学草稿・原稿研究事典、八木書店、  
2015、404p(pp.156-160.)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

花崎 育代 (HANAZAKI, Ikuyo)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号：00259186

### (2) 研究協力者

内藤 由直 (撮影) (NAITOU, Yoshitada)  
龍谷大学・講師 立命館大学・准教授  
研究者番号：60516813

八原 瑠里 (撮影) (YAHARA, Ruri)  
立命館大学院生

沖川 麻由子 (撮影) (OKIKAWA, Mayuko)  
立命館大学院生 同研修生

児玉 明梨 (撮影) (KODAMA, Akari)  
立命館大学大学院生